

地域ととものに



大学から選ばれた
ミス百万石の2人

「これまで」と「これから」
地域連携プロジェクトの全貌

基金の採択を受け
能登の活性化へ手を携える

対話から始まる相互理解
タウン・ミーティング

キャンパス内の放送局
「web-KURS」とは？

2010.1.20ワークショップ
大学の地域連携を展望する

社会貢献のフロントランナー
金沢大学が示す
地域連携の未来

中村信一学長スペシャルインタビュー

社会貢献のフロントランナー 金沢大学が示す 地域連携の未来

地域社会のニーズを的確につかみ、大学最大の資源である「知」を有効活用するため、金沢大学に地域連携専門の窓口ができてから間もなく8年。金沢大学憲章の柱の一つに掲げられている「社会貢献」に対する期待は近年ますます高まり、大学と地域が手を携える取り組みも広がりを見せてきている。初代の地域貢献推進室長も務めた中村信一学長が、今後のビジョンを語った。

金沢大学長

中村 信一 (なかむら しんいち)

医学博士。昭和19年1月、金沢市生まれ。金沢大学医学部卒業、同大学院医学研究科博士課程修了。同48年に医学部助手、その後講師、助教授、教授を経て、平成10年に医学部長。同14年からは副学長に就任。平成20年4月から学長を務める。専門は医学細菌学。

手をつなげば、
きつとうまくいく。

大学の「知」と地域の「活力」
連携から広がる無限の可能性
夢や希望を持ち続けられる社会の実現に貢献します

地域とともに
金沢大学地域連携推進センター





時代とともに変わる大学 直接的な成果還元を重要視

— 中村学長は初代の地域貢献推進室長を務めていましたね。大学にこのような部署が作られた背景を教えてください。

大学は高度な教育によって優秀な人材を輩出することを使命としています。これは今も昔も変わりませんが、かつてはそれが大学にとつての社会貢献だと認識されていたわけです。しかし、10年ほど前から、大学が持っている資源つまり「教育力」や「研究」、そしてそこから生まれた「成果」をもっと直接的に役立てられなにかという社会の要請が強くなってきました。

その声を受けてできたのが、地域貢献推進室です。それまで大学に何かを依頼するときは、教員と個々のつてを頼るケースがほとんどでしたが、ワンストップ窓口ができたことで地域社会の要望を二元的に集約でき、より速やかな対応が可能になりました。

大学と地域のありよう、大学の果たすべき役割が、時代とともに変化してきたとも言えます。平成18年に改正された教育基本法には、大学のあり方について、「深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と記されています。社



会貢献という直接的な言葉こそ出てはいませんが、近年はより積極的かつ直接的に社会とかかわる大学が求められているでしょう。

事業化前から進んでいた 大学の社会貢献の土壌

— 平成14年に文部科学省の「地域貢献特別支援事業」がスタートしてから、金沢大学の社会貢献に関する取り組みは、加速的に進んできました。

全国の大学と比較して、現在でも金沢大学は社会貢献活動のフロン

カンボジアのアンコール遺跡世界遺産公園の環境調査、中国での新石器時代の遺跡発掘調査など、世界各地で金沢大学発の社会貢献活動が根を張ってきています。このような地道な活動が広がりを見せることで、「地域とともに」から「世界とともに」への発展も期待できます。

能登の里山里海保全から 独自の「里山学」を構築へ

— 中でも能登半島で展開する里山里海の保全活動は広がりを見せていますね。

珠洲市での自然学校運営からスタートした能登半島の里山里海活動は、人材養成のマイスター制度から、



里山の活動を通じて人々の交流もより深まる

過疎地再生を目指すアクトイビティへと広がっています。それだけ魅力ある土地柄なのでしょう。国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットのあん・まくとなど所長も、能登の里山里海の素晴らしさを認めています。

能登半島での活動がますます盛んになり、人材養成や環境保護などで多くの成果が得られれば、それらを一体化した金沢大学独自の「里山学」や「過疎地再生学」が構築できるかもしれません。21世紀の里山

トランナーだ」という自負はあります。早くから動けたということは、当時からそういう活動に対して鋭い感覚を持った教職員が学内にいたのでしょう。これは誇りに思っています。

もう一ついえるのは、社会貢献活動を始めるにあたって、もともと学内にそういう素地、土壌があったということです。学内外でさまざまな活動が展開されていますが、里山里海の活動を例にとつても、白紙の状態で「明日から里山活動を始めましょう、これを社会貢献に結び付けましょう」なんてことは不可能ですね。大学本部が角間に移動したときから、里山を教育・研究の場に活用しようという流れがあったわけです。

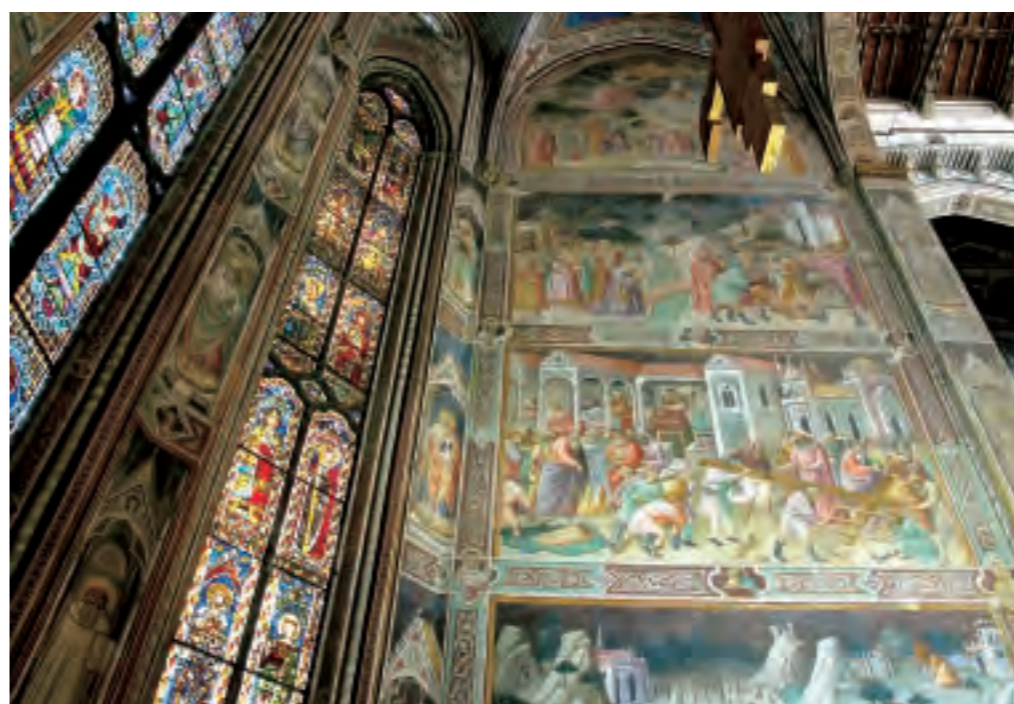
文部科学省の予算的支援を受けて弾みはつきましたが、このように金沢大学には以前から社会貢献に対する土壌ができていたのだと思います。

ますます広がる活動の輪 国際貢献への発展も期待

— 中村学長は就任時に「国内のベスト10大学を目指す」と表明し

ました。金沢大学憲章では、「教育」「研究」のほかに「社会貢献」を柱に掲げていますが、ベスト10大学を目指すにあたって、大学の社会貢献活動は大きな武器になるのではありませんか。

イト・プラザでのミニ講演や公開講座があり、また教育プラザ富樫では子育て支援、さらには学間に地元の見点をふんだんに取り入れた金沢学、地域経済塾などの事業も展開しています。



金沢大学が中心になって修復を進めたサンタ・クロチェ教会の壁画

が集まっています。能登の活性化の糸口が見つかれば、「研究によつて社会を動かした」ともいえるわけで、我々の活動にも弾みがつくでしょう。

社会ニーズのアンテナ高く 研究成果もわかりやすく

— これからの社会貢献に関して、教職員に望むことはありますか。

まず一人一人が何事にも「自分たちの大学は、自分たちでつくる」という気概を持つてほしいと思っています。教育も研究も、また社会貢献活動に関しても同じことが言えます。それだけが誇りと使命感を持って、常によりよき姿を目指す大学でありたいですね。

加えて、個々の教員が何をやっているのか、どんな研究をやっているのかをわかりやすく示すことも大切です。社会から見て、「大学が何をしているのかわからない」というのでは、連携も進みません。

地域連携推進



地域社会のニーズをつかむために開かれるタウンミーティング

センターには、社会からのニーズに対するアンテナを高く張ってもらいたい。研究の現場では、その研究がどう社会貢献に結び付くかわからないこともあるでしょう。日常の研究が、実は社会貢献にも結び付くという事例はたくさんあります。

「研究内容をわかりやすく示す」「学内でも社会のニーズに敏感に対応する」この2つを実践していくことで、地域連携の裾野は今後もますます広がっていくのではないだろうか。

3 社会貢献のフロントランナー
**金沢大学が示す
地域連携の未来**

6 キャンパスから選ばれた
ミス百万石の2人

8 金沢大学アクションプラン2010
リージョナルセンターを目指して

10 地域連携推進センターの概要

12 社会貢献活動の「これまで」をたどり、「これから」を結ぶ
**各地で芽吹く連携の輪
大学が歩んだプロジェクトの全貌**

16 金沢大学×三井物産環境基金
**産学連携のモデルケースに
能登の活性化へ手を携える**

18 能美市のケースから見えてくる
**対話から始まる相互理解
タウン・ミーティングから生まれたもの**

20 能登の素晴らしさも精力的に取材
**学生の地域貢献プロジェクト
大学放送局「web-KURS」**

22 2010年1月20日 ワークショップ
金沢大学の地域連携を展望する

26 角間の四季を写真で追う
里山の息づかい

28 編集後記

29 金沢大学基金 ご支援・ご協力をお願い



キャンパスから選ばれた ミス百万石の2人

城下町恒例の一大イベントに華を添え、観光親善大使としての役割も担う「ミス百万石」。2009年の同コンテストでは、ミス3人のうち2人が金沢大学から選ばれた。本誌の表紙も飾った2人の素顔をのぞいてみた。



—ミス百万石に応募したきっかけは？

増林 家族の勧めで応募しました。亡くなった祖父からは「大きくなって(ミス百万石に)なれたらいいね」と言われていたんです。内定をもらったときはビックリしました。

寺田 私は小さいころからミスにあげられていました。母も私にミスをさせたかっただけで、一昨年は新聞社主催の写真モデルも務めていたんです。

—2人は選出される前からの知り合いですか？

増林 いいえ、オーディションの会で初めて知り合いました。寺田さんは大学の先輩だし、写真モデルとしての経験もあるので、いろいろ聞けるのが頼もしいです。とっても落ち着いた美人だと思いますよ。

寺田 私も増林さんが同じ金沢大学の人だとわかって、親しみがわきました。かわいい後輩だと思いますし、すごくしっかりしていて妹のような存在です。

—ミスの仕事で大変なことは？

増林 県外のイベントなどで金沢の魅力をお伝えする仕事も多いんですけど、訪問先の皆さんは金沢についてのいろいろな質問をしてくれます。詳しくないと返答もできないので、観光や気候について一から勉強するのが大変ですね。

寺田 私たちも金沢生まれですが、「何となく知っている」「知っているつもり」ということでも、いざ相手に説明するとなるといい加減なことば言えませんから。やはり、その点は大変です。

—金沢の魅力発信も立派な「社会貢献」になりますね

増林 金沢は現代的な部分と歴史ある部分が融合した街。誇りを持っている都市だと思います。ミスになったからこそできる事に感謝しながら、頑張っていきたいです。

寺田 ミスの仕事は今年6月までですが、まだまだ私の知らない金沢の魅力を探しつつ、それらを情報発信していきたいです。人との出会いも楽しみながらミスの業務に取り組めます。

PROFILE



寺田恵利子さん(25)

金沢大学職員。金沢市出身。社会人のチャリディング部に所属している。「最近では、ディスプレイもののシグネーバズル作りハマっています」。



増林千晶さん(20)

金沢大学地域創造学類2年。金沢市出身。趣味はネットショッピングやゲーム。「何を指すかは決めていませんが、金沢のために働きたいです」。

金沢大学アクションプラン2010 リージョナルセンターを目指して

金沢大学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を目指し、知の育成と人材養成を大学の責務としている。

そのための具体的な目標として、10年後にわが国ベスト10の大学になることを目指し、地域と世界の人々に貢献するため、個々の教員が、何ものにも束縛されることなく、真理を追究するとともに新たな知を創造し、それに基づく教育を進めようとしている。

ベスト10の大学になるための基本方針と基本計画の中には「地域連携」が重要な柱の一つとして掲げられている。より上位を目指すための地域連携の体制について探ってみた。

ベスト10をめざして

ベスト10実現に向け、金沢大学が策定した「金沢大学アクションプラン2010」について、まず基本方針を見てみよう。

基本方針は、大きく「教育」、「研究」、「地域連携」、「運営」の4つの柱に分類されており、「地域連携」というワードが重要な柱の一つに掲げられていることがわかる。

リージョナルセンターとしての役割を果たす

続く基本計画では、それぞれ4つの柱における今後10年間の取り組みが示されている。地域連携については、大きく2つの計画が記されている。

1. リージョナルセンターとしての役割を果たすための施策を実施する。

- ・ 地域社会、自治体との連携を展開する。
- ・ 産学官連携のもとに、大学の持つ知的資源を活用することにより、イノベーションを推進し、地域経済の活性化に寄与する。
- ・ 北陸地域の医療活動における中心的役割を果たすとともに、地域医療の問題解決にあたる。

2. 奥能登に能登オペレーティング・ユニットを設置し、研究に資するとともに、持続的発展や低炭素社会構築の検証場所とする。またここを基点として地域社会の振興に寄与する。

- ・ 能登半島を、国内最高水準の総合的地域研究の拠点とする。

金沢大学は、学内に附属の施設を設置して、この目標の達成を目指している。例えば、地域社会、自治体との連携を展開するセンターとして、平成20年に「地域連携推進センター」を設置した。

さらに産学官連携による、イノベーションの推進に際しては、同じく平成20年に「イノベーション創成センター」を、また北陸地域の医療活動においては、金沢大学附属病院を置き、地域におけるリージョナルセンターの役割を果たそうとしている。



KANAZAWA UNIVERSITY ACTION PLAN 2010

基本方針 BASIC PRINCIPLE

I. 教育

1. 持続可能な社会の構築を目指し、本学は、社会の変化に耐え、自己を確立し、自らの考えと自信を持って、社会に働きかけることのできる能力を涵養する教育を行う。
2. 国立大学法人としての高等教育の責務を堅持しつつ、時代に先駆けて、将来を見据えた形で改組した3学域・16学類の教育体制を定着させ、この制度のもとに学士力ある人材の育成を目指す。
3. 大学院課程では、高度な専門的知識を修得し、独自の研究を開拓し、国際的評価に耐えうる人材を育成する。
4. 留学生共在型の教育の場を醸成し、国際的視野をもった人材を育成する。

II. 研究

1. 強いところはさらに強化し、これにより全体のレベルアップをも図る。
2. 研究に輝く教員をもって、魅力ある大学形成を目指す。
3. 世界に優位な研究を伸ばし、研究拠点の形成を図るとともに、新しい研究領域を創生する。
4. 基礎研究分野を支援・推進する。

III. 地域連携

1. 北陸の基幹大学として、地域における責務を果たし、リージョナルセンターとしての役割を果たす。
2. 知的資産の活用により産学官連携のもと地域経済の振興・活性化に寄与する。
3. 地域との連携を強化し、地域社会の抱える行政、教育、医療等の問題解決に寄与し、地域活性化を目指した提言と情報発信に努める。

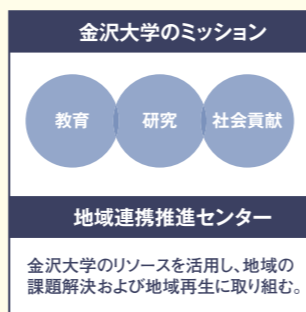
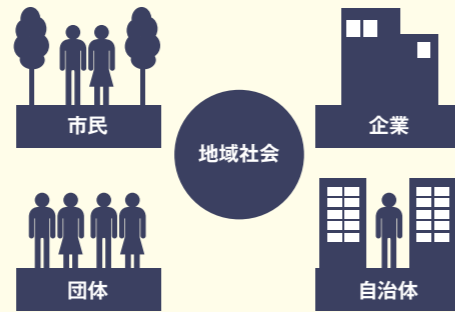
IV. 運営

1. 広く学内外の意見を取り入れ、法令遵守に基づいた透明性の確保と説明責任を果たし、自主・自律の運営を行う。
2. 大学の基盤は教職員にあるとの認識に立ち、教職員の適材適所における活用と組織のスクラップ・アンド・ビルドにより、教育・研究・運営の質の向上を目指す。

金沢大学地域連携推進センター概要(平成20年4月設置)

生涯学習部門

講習会や研修事業などを通じて、社会教育関係者や司書教諭等の専門性の向上を図るとともに、さまざまな学びの機会の提供により、個人の要望や社会の要請に応え、生涯学習の振興そして「知」の共創と循環に寄与する。



地域連携部門

大学が有する人材や知的財産を地域の課題解決のために活用する。連携は人と情報の相互交流を深め、協働というパートナーシップを進めるとともに、課題解決で実施されたプログラムは大学の教育や研究にも活用する。

人と地域を繋ぐ [指導者養成・研修]

社会教育主事講習(文部科学省委託事業)

社会教育・生涯学習の専門家やリーダーとなる社会教育主事を養成し、社会教育法に基づく資格を付与する講習。参加型学習によって知識と実践力、プレゼンテーション能力を身につける。

事業企画力向上セミナー

生涯学習・社会教育等の事業を企画する方を対象に、その資質・能力の向上を図るリカレント教育をワークショップ中心で実施し、実践力を高める。

学校図書館司書教諭講習(文部科学省委託事業)

学校図書館の専門的職務に携わる司書教諭を養成し、学校図書館法に基づく資格を付与する講習。学校における子どもの「読書離れ」解消への取り組みの中核的な役割を担う力を身につける。

知との出会い [生涯学習事業の企画実施]

金沢大学公開講座

価値観の多様化、高度化する学習ニーズに対応し、一人一人の自発的な学習活動を支援するため、幅広い分野の講座を企画し、生涯にわたる学びをサポート。

ミニ講座

地域と大学の交流を深めるため、まちなかにある「金沢大学サテライト・プラザ」において金沢大学教員が最先端の研究など、さまざまな分野について分かりやすく解説。

市町共催講座

石川県内の各市町教育委員会が地域住民を対象として企画する講座。金沢大学などの教員が講師となって出向き地域住民の生涯学習を市町教育委員会と一体となって支援。

大学と地域が連携する「能登モデル」

「能登里山マイスター」養成プログラム

過疎化が進行する能登半島の活性化を目指し、環境配慮型の農林水産業を志す若い世代を「里山マイスター」として人材養成するプログラム。教員スタッフが能登に駐在し、担任制による2年間のカリキュラムで5年間で60人以上の里山マイスターを輩出する。

「里山里海アクティビティ」の創出

能登半島の活性化のため、都市との交流を拡大する。このため、協働ディレクター1人と地域コーディネーター2人を能登に配置して、若者や大学生・研究者を3年間で延べ1000人受け入れ、里山里海での保全活動や調査研究を実施する。

「能登いきものマイスター」の養成

里山里海の生業(なりわい)と自然生態のかかわりを教える里山教育のプロフェッショナルを養成する。

能登オペレーティング・ユニット構想の支援

能登半島では大気観測による東アジアの環境研究や、生物多様性の生態調査が進められている。こうした能登におけるフィールド重視型の教育研究活動のさらなる可能性を探る「能登オペレーティング・ユニット構想」も実現に向けて動き始めた。地域連携部門では構想の実現と、研究成果を地域に還元する支援を行っている。

自然と人が調和する持続可能社会の提言

本州最後のトキが息絶した能登半島には豊かな自然環境や暮らしと文化が遺されている。石川県からの助成で実施している「自然との共生による地域づくりをめざした能登振興研究プロジェクト」では、再びトキが舞い降りる里山環境の再生や、持続可能な社会づくりの提言を行う。

大学と地域が対話する「タウン・ミーティング」

金沢大学では、地域との対話を通じて大学が地域に果たす役割を考えるタウン・ミーティングを2002年から毎年開いている。「能登里山マイスター」養成プログラムは、珠洲市や能登町でのタウン・ミーティングで上がった「人材を育てる場を地元につくってほしい」との声に応えたもの。

市民との協働と地域課題の解決をめざして

地域活性化プロジェクト

地域活性化プロジェクト(いしかわ金沢学、まちづくり・観光学、市民大学院、地域経済塾)では地域の学びのニーズや情報発信、地域課題の解決に取り組んでいる。

角間の里山自然学校

角間キャンパスでは、市民ボランティア「里山メイト」が竹林の保全活動や棚田の復元を行っている。角間の里山自然学校(1999年発足)は地域と大学の交流拠点となっている。

地域課題ゼミナール

大学コンソーシアム石川に協力し、地域課題ゼミナールや能登半島全国発信プロジェクトに積極的にかかわっている。

学生による地域連携の取り組み

web-KURS

学生が運営する、インターネットを利用した音声による放送局。学内だけでなく、地域に飛び出して、話題の発掘を行っている。動画コンテンツを制作し、地域のケーブルテレビで放送する取り組みを行っている。

地域連携の関連施設



能登における大学と地域の研究交流 金沢大学能登学舎

施設概要
廃校になった珠洲市の小学校を借り受け一部改装して利用

実施しているプロジェクト・事業
「能登里山マイスター」養成プログラム、里山里海アクティビティ、「能登いきものマイスター」の養成、トキやコウノトリの生態環境調査、大気観測、能登スーパースイト

特徴
能登半島の先端に位置し、前方には海を臨み、後方には里山が広がる。体育館はスポーツやシンポジウムなど幅広い用途

利用案内
里山里海食堂「へんざいもん」
地域の女性グループが食材を持ち寄って作る郷土料理が特色。毎週土曜の昼のみ営業(能登学舎1階、要予約)
平日/11:00~19:00 土・日・祝/10:00~18:00
休館日/毎週日曜日と月曜日(その他の休館日はホームページで)
〒927-1462 珠洲市三崎町小泊33-7
※問い合わせは地域連携係へ
TEL 076-264-5290 FAX 076-234-4045
E-mail: chrenkei@adm.kanazawa-u.ac.jp



大学と地域の交流拠点 金沢大学創立五十周年記念館「角間の里」

施設概要
石川県白山ろく旧白峰村の築300年の古民家を移築

実施しているプロジェクト・事業
角間の里山自然学校

特徴
1階と2階には板張りの部屋があり、研修室や講義室として使用

利用案内
平日/9:00~17:00
休館日/毎週日曜日と月曜日
〒920-1192 金沢市角間町
TEL 076-264-6698 FAX 076-264-6699
E-mail kakusato@adm.kanazawa-u.ac.jp
URL http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/ad_chiiki/kakusato/kaku-top.html



学びと情報の発信拠点 金沢大学サテライト・プラザ

施設概要
金沢市西町教育研修館の一角を利用

実施しているプロジェクト・事業
大学インフォメーションセンター、ミニ講演、公開講座、各種催し

特徴
まちなかから金沢大学の学びと情報を発信し、市民の交流の場に

利用案内
平日/11:00~19:00 土・日・祝/10:00~18:00、
休館日/毎週火曜日
(その他の休館日はホームページで)
〒920-0913 金沢市西町三番丁16番地
(金沢市西町教育研修館内)
TEL 076-232-5343 FAX 076-232-5383
E-mail satelite@spacelan.ne.jp
URL http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/ad_koho/satellite/default.htm



角間中央交差点の半円形の建物が地域連携推進センター

地域連携推進センターの概要

金沢大学の地域連携を大きく担う3つの部局(地域連携推進センター、イノベーション創成センター、金沢大学附属病院)のうち、総合大学にふさわしいグローバルな視点を持ちながら地域の課題解決により一層取り組むため、地域社会や自治体との連携を展開するのが、地域連携推進センターだ。

社会貢献活動の「これまで」をたどり、「これから」を結ぶ

各地で芽吹く連携の輪 大学が歩んだプロジェクトの全貌

金沢大学は法人化とともに、大学の憲法ともいえる「金沢大学憲章」を制定、その中で「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という理念を掲げ、「教育」「研究」「社会貢献」の3つを柱に活動を続けている。中でも、社会貢献は全国的に見てもユニークなアイデアあふれる事業を展開しており、その活動は国内トップレベルにあるといえるだろう。大学が誇る地域連携・社会貢献の「これまで」と「これから」をまとめた。

地域連携のこれまで

地域連携の窓口一本化 専任の教員や担当者も

地域から大学への地域貢献の総合窓口として、また情報発信の拠点として、大学が「地域貢献推進室」を設置したのは、平成14年の5月。文部科学省の地域貢献特別支援事業費の助成も受け、全国に先駆け設置した「地域貢献コーディネーター」は、大学内で地域貢献プランを企画・推進する専任の担当者として現在も活躍している。

平成16年に法人化した際は、大学憲章に記した「社会貢献」という柱に明確に対応するため、大学は「地域貢献推進室」から「社会貢献室」に改組して、地域のニーズにより一層応じた。

平成20年4月には、地域の生涯学習を含めた社会貢献、地域の課題解決をより一層推進するため、専任の教員がいる大学内の部局として、「地域連携推進センター」を設置。大学における地域連携の「ワンストップ窓口」として機能を果たしている。

教員と市民の絆も育んだ 地域活性化プロジェクト

金沢大学の地域連携・社会貢献の活動が、全国でもユニークだと評価されるのは、地域と密着し、地元ならではの独創的で面白いプロジェクトが多いからだ。

平成17年からの「地域活性化プロジェクト」では、「いしかわ金沢学」「観光学・まちづくり」「市民大学院」「地域経済塾」という4つのユニークな地域活性化のための事業を展開した。「いしかわ金沢学」は、地域に点在する有形無形の文化的遺産・資源を集積し、その文化的価値を明らかにするとともに、それらを用いた学習活動を行い、歴史・世代の流れを認識し、文化の継承と発展を図った。「観光学・まちづくり」は、大学と

地域社会の連携を深め、石川県内の観光資源の掘り起こしや活用プログラムを作り、まちづくり団体との連携や研究会の開催、地域づくり学生



全国各地の関係者が能登里山マスター養成プログラムの視察に訪れている

インターシブ事業を実施した。

「市民大学院」は、1年制の市民向け大学院として、北陸地域の文化に関する研究テーマを持った市民の研究をサポート。その成果は「金沢大学市民大学院論文集」として公開するだけでなく、優秀な論文については、学会誌への掲載を支援した。

「地域経済塾」は、受講者の理論やスキル向上を図るとともに、受講者・修了者のネットワーク形成によって、強い北陸経済を創っていくことを目指した。市民、企業人、行政職員を対象としたマネジメントなどの各種講座も好評だった。

これらのプロジェクトは地域の活性化に寄与しただけでなく、普段は接触することが少ない市民と大学教員との間に大小の「絆」を生んだ。大学が得た信頼も決して小さくはない。

自然豊かな敷地を利用 里山プロジェクト

数ある地域連携の取り組みの中でも、「金沢大学らしい」といえるのが、里山を利用したプロジェクトだ。自然豊かな角間キャンパスの3分の1（約74ヘクタール）を里山ゾーンとして活用すべく、「角間の里山自然学校」を置き、角間の里山を青少年の自然体験や地域住民の生涯学習に利用、多彩な活動を繰り広げた。

さらに市民のサポーターを「里山メイト」として登録、自らの手で活動プログラムを企画・運営してもらった。ボランティア活動にもかかわらず、その数は650人を超えた。また平成17

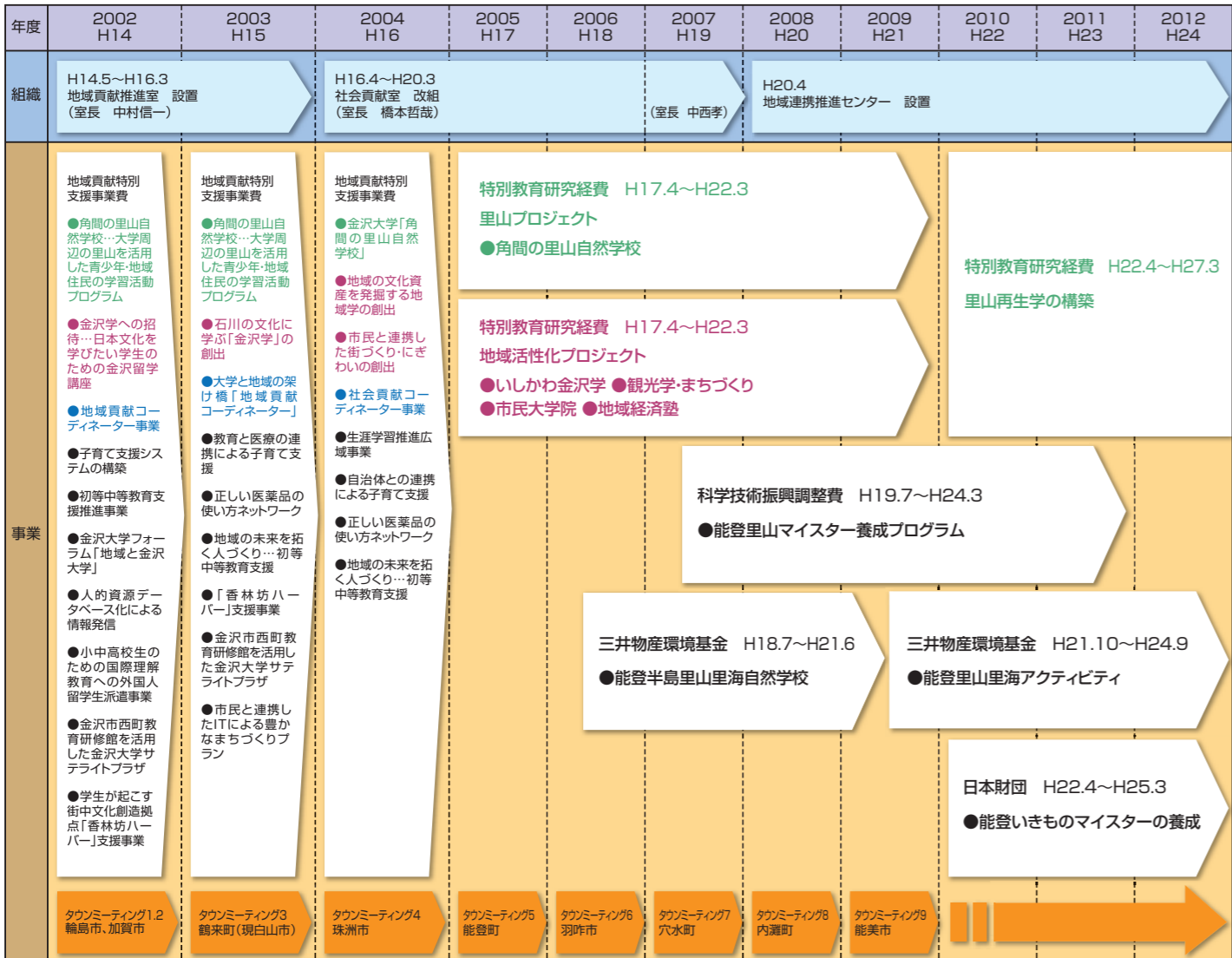
年には、「里山駐村研究員制度」を実施し、県内外の一般人を研究員に委嘱。里山活動の情報提供や大学への提言、研究者との意見交換など、大学と連携した活動に励んだ。

加えて同年には、金沢大学の創立50周年記念館「角間の里」を開設した。移築再生した300年前の古民家は、里山自然学校の拠点にもなった。また、三井物産の支援を受け、角間の里山自然学校でのノウハウを能登半島にも展開する形で、平成18年に珠洲市に「能登半島里山里海自然学校」を開校した。

能登の里山で人材養成 県や自治体と協定締結も

そうした里山における活動の集大成が、文部科学省科学技術振興調整費によって平成19年からスタートした「能登里山マスター」養成プログラムである。珠洲の能登学舎で2年間、環境配慮型農水産業を学び、次世代のリーダーや地域の担い手を養成する。これは、まさに大学のリソースを最大限に利用した人づくりの事業であり、大学にしかできない教育を基本とした地域再生・地域貢献といえるだろう。

この里山マスター養成プログラムをきっかけに、大学は平成19年7月、輪島市、珠洲市、穴水町、能登町と能登半島の地域再生を目指す「地域づくり連携協定」を締結した。また、今までの地域連携の活動が実を結ぶ形で、平成21年には石川県、金沢市と包括連携協定を締結した。



地域連携のこれから

専門家と連携し本格管理「角間里山本部」を設置

平成22年度に、金沢大学は「角間里山本部」という組織を設置する。これは21世紀型の里山モデルを提案して、外部の専門家と連携協力しながら、キャンパス内の里山を教育、研究、社会貢献のために管理・活用していくものだ。

自然学校、マイスターそしてアクティビティへ

「里山」「里海」は、持続可能な



能登の大地に根づく里山里海の資源（写真は輪島の千枚田）

資源管理システムとして世界的に注目を集めており、「SATOYAMA・SATOUMI」は国際用語としても定着しつつある。しかし、全国の里山里海で過疎高齢化が進行し、限界集落や集落崩壊が問題となっている。金沢大学では前述の通り、能登半島の里山里海を保全・活用する「能登半島里山里海自然学校」の運営、地域再生を行う人材を育てる「能登里山マイスター」養成プログラムを実施してきた。

②大都市と能登地域の交流活動の活性化」を目指して平成21年度から実施するのが、「里山里海アクティビティ」である。里山里海アクティビティは、専属の「協働ディレクター」が能登に常駐。能登の里山里海資源を活用したアグリビジネスやツーリズムなど、地域の内発的活動を創出するとともに、都市圏の大学、企業、行政から若手の人材を能登に呼び寄せ、里



都市圏の意欲ある人材を能登に呼び寄せる里山里海アクティビティ



生物多様性について子どもを教育する「いしかわグリーン・ウェーブ 2009」

里山での個々の成果を「里山再生学」に昇華

地域の過疎・高齢化は、いずれ

山里海の保全活動を展開する。大都市圏の大学や企業、行政の協力のもと、3年間で約1千人の若者・学生を受け入れ、里山里海の保全活動を実施するとともに、地域内・地域外両面からの地域再生を目指している。また、平成22年度から、里山里海の自然と生業を学ぶ「能登いきものマイスター」の養成もスタートして、より一層の能登の活性化が期待される。

り、大学憲章3つの柱である「教育」「研究」「社会貢献」を端的に表している。

これら、地域を活性化するプロジェクト、そして里山を利用した教育・研究による地域再生の活動は、「地域」と「環境」の再生を同時に達成し、その果実を社会へ還元するという新しい循環を生み出してゆく。この地域連携が生み出すのは、大学と地域との新しい「連携」と「共生」であり、他の大学がまだ達成したことのない新しい領域でもあるのだ。

能登における大学の拠点オペレーティング・ユニット

金沢大学は、平成22年度から27年度までの第2期中期計画で「能

士力向上の目標」である「持続可能な共存社会を構築する力」を身につけるための全学的な教育カリキュラムを構築していく。里山を舞台とした濃密な教育、研究、地域連携は、やがて「里山再生学」として構築されるのかもしれない。

登半島を中心とした総合的・多角的な地域研究を推進し、特色ある地域研究の拠点を形成することを目指している。

多様化した教育研究活動をさらに高度に展開し、地元自治体との強い協力と連携を図りながら、金沢大学にしかできない、地域貢献に資する教育・研究を実施するため、能登における大学の拠点として具現化したものが、「能登オペレーティング・ユニット」である。この拠点は能登における大学の機能を担ってお



黄砂を観測して環日本海域の環境動態の解明を目指す「能登スーパーサイト」



豊かな自然に包まれた角間の里山ゾーン



キャンパス内で農作物の栽培も行われている

産学連携のモデルケースに 能登の活性化へ手を携える

金沢大学×三井物産環境基金

年の瀬も間近の12月10日、中村信二学長は東京の三井物産本社を訪れた。同社は東京都千代田区大手町1丁目にあり、案内された23階の応接室から皇居がよく見える。同行した中村浩二教授は「常緑樹が6、7割。(皇居北側の)落葉樹が多いところは、かつての武蔵野の面影が残っている」と目を凝らした。同社訪問の目的は、金沢大学が三井物産環境基金に申請した案件が採択となったことに対し、代表取締役社長の飯島彰己氏に敬礼を兼ねたあいさつと連携を深めるためだった。



産学連携の発展に期待する飯島三井物産社長

3年間で1千人を目標 基金活用で過疎地再生

今回採択された基金申請は「能登半島における持続可能な地域発展を目指す里山里海アクティビティの創出」(以下、「里山里海アクティビティ」)。能登半島に若者や学生を呼び込み、里山の保全や環境教育・研究を実施し、交流活動の拡大と地域の内発的なビジネスを促し、地域の活性化を創出する。目標を3年間で1千人と設定し、その受け入れのために「協働ディレクター」1人と「地域コーディネーター」2人を

能登に配置するというプランで、中村教授はそのプログラム・リーダーだ。中村学長はあいさつの中で、「里山里海アクティビティをはじめ、新しいエネルギーの開発や、バイオテクノロジーを使ったキノコの増産の研究も行いたい。能登に新たな価値を創造することで若者や学生、研究者が行き交うようになれば、地域活性化の端緒は開ける。それを『能登モデル』として、国内やアジアに発信していきたい」と抱負を話した。

型の新たなビジネス分野としてメデイカル・ヘルスケア事業を柱に据えている。産学連携でぜひお願いしたい」と話は弾んだ。中村学長と飯島社長は初顔合わせにもかかわらず、呼吸の合った雰囲気の良い面談となった。

里山里海が取り持つ縁 事業交流の輪が広がる

こうしたトップ同士の会話が弾んだ背景には、支援する側とされる側という立場を超えた実績と信頼関係が背景にある。そのきっかけは、平成

このときにも三井物産CSR推進部は、ブラジル人学校の子どもたちに食料を送る呼びかけをした。これに呼応する形で金沢大学地域連携推進センターでは、能登の農家の協力を得て、ブラジル人が多く住む広島県に米やイモ類などの食料を届けた。この食料を送る運動は散発的ながら今も続いている。

大気観測でも助成獲得 研究成果を社会に還元

三井物産からは学術面での支援

も受けている。平成20年4月には同じく三井物産環境基金による研究助成として「能登半島での大気環境モニタリングを通じた東アジア域環境ガバナンスへの貢献」能登スーパーサイト構想」が採択された。能登の里山里海自然学校のグラウンドから気球を上げて黄砂を採取し、また、屋上に観測機器を設置して大気の大気観測を行っている。研究代表の岩坂泰信特任教授は「能登半島は東アジアの環境センサーである」と日本海に突き出した能登の立地が、大気観測による環境研究に役立つ

と述べている。同年6月、元アメリカ農務省国際農業開発局長で環境活動家として有名なレスター・R・ブラウン博士を招いて開催した「環境フォーラム in 金沢」(石川県立音楽堂ホール)は、三井物産北陸支店の提案で、金沢大学と三井物産が共催する形をとった。金沢大学がレスター氏の講演を中心にもとめ制作したビデオ(90分)がCS放送「朝日ニュースター」で放送され、さらに三井物産の社内研修用としても使われている。

ちなみに、「里山里海自然学校」「能登スーパーサイト」「里山里海アクティビティ」の3つのプログラムで、三井物産環境基金からおよそ1億円の支援を受けており、企業の社会貢献とそれを受ける大学側との信頼関係がより大きな相乗効果を生んでいる。金沢大学は3つのプログラムの実績を踏まえた「能登オペレーティング・ユニット」構想を打ち出し、能登半島における研究、教育の独自性と優位性を内外にアピールするとともに、その成果をさらに社会に還元していく。

生んでいる。金沢大学は3つのプログラムの実績を踏まえた「能登オペレーティング・ユニット」構想を打ち出し、能登半島における研究、教育の独自性と優位性を内外にアピールするとともに、その成果をさらに社会に還元していく。

能登半島における持続可能な地域発展を目指す 里山里海アクティビティの創出

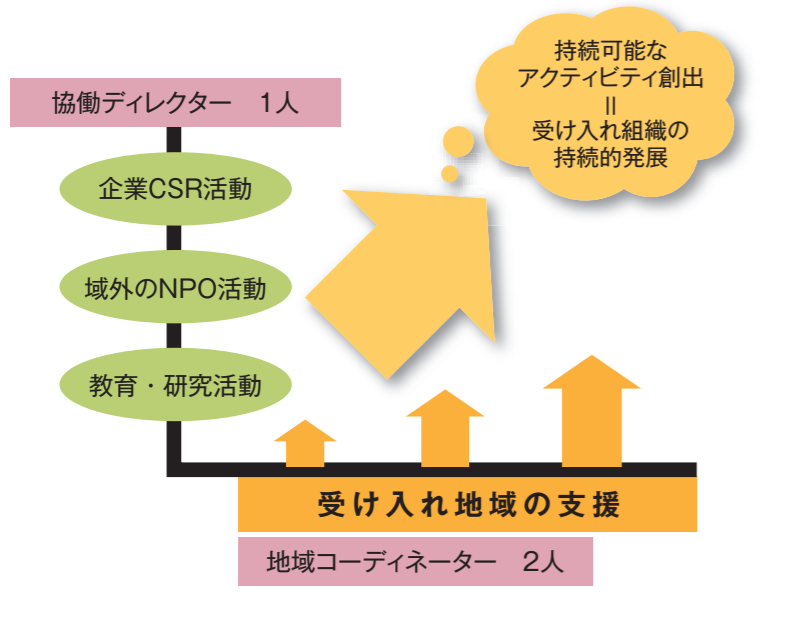
2009~2012

ミッション① 里山里海の調査研究や交流活動の拡大

▶▶3年間で1000人の学生・研究者・若者を能登半島に

ミッション② 内発的な地域ビジネスの創出

▶▶駐在するディレクター1人とコーディネーター2人を配置



里山里海アクティビティは、能登半島に3年間で1000人の学生、研究者の受け入れを目指している



今後の活動について活発に意見を交わす(左から)飯島社長、中村学長、中村教授



市民の意見を真剣に聞き、質疑に答える第1分科会座長の
中村教授(右)と第2分科会座長の神谷教授

能美市のケースから見えてくる
対話から始まる相互理解
対話を通じて大学が地域に果たす役割を考え、地域のニーズを大学運営に生かすことを目的に、金沢大学は毎年、石川県内各地で「タウン・ミーティング」を開催している。平成21年度は、能美市が目指す「環境のまち」や、大学と市の連携のあり方について市民とともに話し合った。能美市とのタウン・ミーティングを通じて、そこから生まれたものを考えていく。

対話から始まる相互理解 タウン・ミーティングから生まれたもの

昨年12月に能美市で「環境」をテーマに開催

平成21年12月19日、能美市の石川ハイテク交流センターで開かれた「自然と暮らしが調和した環境のまちを目指して」活かして守る能美づくり」。市が策定した「環境基本計画」が平成21年度にスタートすることから、環境とまちづくりをテーマにしたタウン・ミーティングとなった。中村信一学長と酒井悌次郎市長のあいさつの後、大学、市、市民団体の7人が、ごみのリサイクルの現状やグリーンカーテン(ツル植物で窓を覆う取り組み)、里山の保全活動を紹介した。

この中で、北陸先端科学技術大学院大学の山本和義教授が同市の

環境基本計画のポイントを説明したほか、いしかわ動物園(同市)の馬秀夫園長が1月8日に同園に移送される国際保護鳥トキの受け入れ状況を説明し、「自然と人が共生するシンボルとして、トキをテーマに子どもたちの環境学習を市民の皆さんと進めていきたい」と意欲を述べた。また、金沢大学の川島平一地域連携コーディネーターは、市が目指す「バイオスタウン構想」について、里山を活用した環境ビジネスなどを提案した。

分科会、全体会で活発討論 キャンパスの活用も模索

午後からは分科会に入り、第1分科会(座長・中村浩二教授)では「自然とまちづくり」をテーマに話し合った。

金沢大学の中村浩二教授(環日本海環境研究センター長)は、共同研修センターなどの施設がある同大学辰口キャンパスについて、学内の委員会にワーキンググループを設置し、有効活用について学内で検討を重ねていることを報告した。

地域で里山活動をしている市民は、「(辰口キャンパスの)山林は老齢化し、二酸化炭素の吸収能力はかなり落ちていっていると推測している。能美市民と大学と一緒に里山の保全再生活動をしてはどうか」と提案。これを受けて中村教授は、「行政と大学で包括協定を結ぶなどして、活用に向けた話を進めていきたい」と、今後の辰口キャンパス活用への道筋を説明した。



話題提供で出た課題に対して、分科会で活発に討議し、参加した市民が自由に意見を述べる

浩夫教授「地域連携推進センター長」では「暮らしとまちづくり」をテーマに意見交換が行われ、「美化センターからゴミの出し方」や「人間とカラスの共存策」「水質汚染について」といった暮らしに直接関わる問題を話し合った。また、能美市婦人団体協議会が取り組む「グリーンカーテン」に関して「ぜひ市に広めてほしい」と賛同する意見も出た。参加した金沢大学の学生からは「学生と市民が話せる場がほしい。そのためにも、辰口キャンパスを市民と学生と一緒に活用できるようにしてほしい」と提言があった。

この後開かれた全体会議では、金沢大学と能美市との接点ともいえる辰口キャンパスの活用方法が議論の中心になった。活用方法を巡っては、中村学長があいさつでも触れたほか、話題提供者の小川将友さん(能美の里山ファン倶楽部)からも提案があり、「辰口キャンパスの開放と利用に向けた取り組みを今後ど

う進めていくか」という課題をタウン・ミーティングの一つの成果として具体化させていくことを確認した。今後は、環境教育や市民交流の場としても辰口キャンパスを利用すべく、市との連携を図っていく。

地域と手をつなぐために 住民の声を聞き続ける

能美市でのタウン・ミーティングを通じて見えてきたのは、地域の住民が日々自分の住む街の環境に関心をもち、生活しているという点だろう。それは、当然のことであるようにも思えるが、住民が日々思っている意見や希望を公の場で述べる機会とい

うのは、それほど多くはない。今回は、地域の住民の関心の高い事項について、それぞれの立場から意見を述べることで、問題意識や関心をより一層高めるだけでなく、住民と自治体が一体となって、街をよりよくしようという強い結束力が生まれていることが実感できた。

金沢大学が企画したタウン・ミーティングは平成14年度の輪島市を手始めに、これまで加賀市、鶴来町(現白山市)、珠洲市、能登町、羽咋市、穴水町、内灘町の各地で開催された。地域から、大学に対してさまざまな要望が提案され、そこからいくつもの連携も芽生えてきている。例えば、「能登半島里山里海自然学校」は珠洲市でのタウン・ミーティングを通じて交流の中で生まれた。その実績が、現在実施している「能登里山マイスター養成プログラム」につながっている。

どのような意見や提案が地域住民からあり、大学と地域の連携のプロジェクトに結びつくかは、タウン・ミーティングを実施しなければわからない。住民との対話から生まれたプロジェクトは、素晴らしい「地域連携」



平成21年12月に開かれた「金沢大学タウン・ミーティングin能美」

の成果であり、果実である。しかし、必ずしも毎回果実が生まれるわけではないのも事実だ。真に社会と地域から信頼され、大学がリーダーシップとして地域住民から認め

られるためには、継続してタウン・ミーティングを実施し、大学としてできることを地域に問い、住民の声を聞き続ける姿勢がもっとも必要なのかもしれない。

能登の素晴らしさも精力的に取材 学生が手がける金沢大学放送局、通称「Web-KURS」(以下、ウェブクラス)という地域貢献プロジェクトがあるのをご存じだろうか。学生自らが地域貢献の一翼を担うことから、その活躍にも期待が集まる。放送だけでなくとどまらぬ、彼らの活躍する姿を追った。

大学の社会教育の二環として、また金沢大学へのインターンシップの一環として、ウェブクラスは平成17年に活動を始めた。主に音声による学内放送を実施しており、学生が編集・取材の方針を決定しながら、学内の有益な取り組みを番組として紹介するプロジェクトだ。

平成20年度からは、映像コンテンツの作成及びインターネットによる情報提供にも積極的に取り組み、平成21年には、10年近く担がれたキリコの絵を金沢美術工芸大学の学生が描き換えるというプロジェクトに同行し、キリコ祭にかける地元住民の思いとキリコ絵を取材し、その記録映像の制作にも携わった。

学コンソーシアム石川(石川県内すべての高等教育機関が参加する教育・研究の連携機関)が募集した「学生による能登活性化プロジェクト事業」に応募したところ、その地域貢献の提案が見事採択されたのだ。

採択されたのは「能登の星空プロジェクト」。「日本の里100選」に選ばれた輪島市金蔵地区の美しい星空を写真に収めながら、能登の自然と文化と人々の素晴らしさも併せて伝えるのが目的だ。



今回のチャレンジで撮影した「星空写真」。天候が刻々と変化。そのような悪条件にもかかわらずスタッフが力を合わせて撮影した作品

12月25日

坂下 瑞さん

能登に魅了された米国の著名な天文学者パシバル・ローエルを研究する坂下さんを訪ねた。パシバル・ローエルは、天文学者としての冷静な視点とは別に、芸術家的な温かい目も持ち合わせる。能登に惹かれてわざわざ東京から電車や人力車、馬車を使って旅してきた。そんなローエルと能登との密接なつながりについて、坂下さんから話を聞く。



13:00 能登井「能登ガキ井」 レストラン「穴水とつりゅう」

能登井とは、奥能登地区の2市2町(珠洲市、輪島市、能登町、穴水町)の店舗が提供する地元素材を使用したオリジナルの丼。奥能登産のコンヒカリや魚介類、野菜などを使う、能登産の器や箸を使うなど「能登井」を名乗るための条件がある。数多くの種類がある能登井の中から、とりゅうの「能登ガキ井」にスポットを当てる。



18:00 夕食の準備

地元の鮮魚店で、この時期の能登のおいしい食材としてアンコウを薦められた。地元で有名な食材を集めて、アンコウ鍋&海藻鍋の料理開始。能登のおいしい食材を味わう。これも取材の一つだ。



12月26日

10:00 カフェ「木の音」

金蔵にある慶願寺という寺院を改造したカフェ。8月16日の万燈絵などで金蔵を訪れる県内外の人々のための休憩場所を作ること、「せつかくある地元のおいしい食材を使わない手はない」という思いが合わさって、平成17年にカフェをオープンした。オーナーの日向文恵さんを取材。



13:00 時国家

上時国家、下時国家は、源平・壇ノ浦の戦いで敗れた平家一門のうち、「平家にあらずんば人にあらず」と誓ったことで知られる武将・平大納言時忠の末裔の邸宅。約800年の歴史を受け継ぐ「時国家」を取材。



22:00 星空撮影にトライ

刻々と変化する夜空を観察しながら、星が降り注ぐ瞬間を待つスタッフ。しかし、なかなかチャンスは訪れない。能登の満天の星空が現れるのを期待して、静かにその時を待つ。23時ごろになって夜空のあちこちで星が輝き始め、ようやく撮影に成功する。しかし、能登の冬空は変化が早く、「満天の星空」とはならなかった。さらにチャンスを待つスタッフたち。



15:00 輪島市「中島酒造店」

輪島市鳳至にある「中島酒造店」。蔵元である中島浩司さんから、心の込められた酒造りについて話を聞く。また、深酔いを避けるため、日本酒を飲みながら飲む水を「和らぎ水」というが、そのネーミングを考えたのが、奥様のこと。お酒の飲み方や、ご主人の酒造りへの熱意も聞いた。



18:00~ 取材まとめ

ウェブクラスがまとめた星空プロジェクトのレポートは、「能登半島全国発信プロジェクト」を通じてウェブサイト「能登スタイル」(<http://www.notostyle.jp/>)から発信された。

星空プロジェクトは終了したが、ウェブクラスは、サイクルの枠を超えた学生による地域貢献プロジェクトを今後も続けていくという。今年からは、学内の話題のみならず、地域と連携しながら学生と地域住民にとって有益な情報をインターネットを利用して動画などで発信することも計画している。



金大祭を取材するウェブクラスのスタッフ



角間の里のイベントにおいて、研究者にインタビュー

2010年1月20日
ワークショップ

金沢大学の 地域連携を 展望する

地域貢献の総合窓口として、金沢大学に「地域貢献推進室」ができたのが平成14年。その後も部署の名前こそ変わってきたが、連携のための窓口は現在にいたるまで発展し続け、個性あふれる地域貢献、地域連携事業を推進してきた。その活動を振り返るためのワークショップ「金沢大学の地域連携を展望する」が1月20日、角間キャンパス自然科学大講義棟1階のレクチャーホールで開かれ、市民や教職員らが活動報告やパネルディスカッションを通じて地域連携のあり方を見つめ直した。パネリスト、参加者の声をまとめた。



第1部 これまでの地域連携 プロジェクトの成果

初めに、中村浩二学長補佐（社会貢献担当）が、「この10年、金沢大学は地域連携で全国をリードしてきたと自負している。今日はさつく

ばらんに話し合い、金沢大学の特色を生かした地域連携の取り組みを発展させていきたい」とあいさつ。八重澤美知子（いしかわ金沢学）

碓山洋（地域経済塾、佐川哲也（里山）の3教授と江崎哲史研究員（観光学・まちづくり、市民大学院）が、それぞれのプロジェクトの概要を説明した後、3教授に神谷浩夫地域連携推進センター長、川島平一地域連携コーディネーターを加えた5人がプロジェクトを総括するためのパネルディスカッションに臨んだ。

事業の個性が強く 体系的が薄い

人間社会研究域人間科学系
博士研究員 江崎哲史



観光学・まちづくり分野における課題として、従事する教員が少ないことで活動の幅に制約が生じた点が挙げられる。また、個々の事業の個性が「観光学・まちづくり」部門としての体系的を薄めている。



れが地域貢献にもつながった。留学生が帰国後、石川の文化や情報を発信してくれたこともそう。また、地域の方と交わることで、学内で意図しない心理的・具体的サポートを受けることができた。もともと地域の魅力を発信していきたいが、今後は「学問とどう結びつけていくか」という観点も重要になってくる。

学問との 結びつきも重要に

留学生センター
教授 八重澤美知子

いしかわ金沢学は、もともと留学生向けの教育プログラムだったが、そ

企画立案できる 人材育成を

人間社会研究域経済学経営学系
教授 碓山洋

地域経済塾はビジネスパーソン向けの講座だが、「どうすれば儲かるか、勝てるか」という話ではなく、特に能登地域では共存しながら生き残る



術を考えていった。大学が開く講座としては高額の設定をしたが、2度、3度と参加してくれた人もいたし、受講者同士が勉強会を開くなど広がりを見た。我々が出向くことも大切だが、自ら地域経済塾のような企画を立てて運営して、いける人材を地域単位で育てることも大切だ。

バックに研究あつての 社会貢献

地域連携推進センター長
教授 神谷浩夫

大学の地域連携とは何かということを最近よく考える。大学に頼れば何でも社会貢献の資源があるかという、必ずしもそうではない。それぞれ専門分野の研究がバックにあつ



けづくりや、自治体によっては問題意識も考え方にも差があるため、自治体との関係づくりも一つのポイントになってくる。

て、その研究の背景をきちんと（連携相手に）打ち出さないと、大学は「小間使い」や「何でも屋」のようになってしまう。地域連携に関して金沢大学では横の広がり、展開が少し弱い面もあるように思う。



大学らしくない 里山活動を心がけた

人間社会研究域人間科学系
教授 佐川哲也

里山の活動は、「大学らしくなくやろう」と決めていた。研究室にいたのではなく、外に出かけようという心がけた。そこで、「大学の周りには大学を求めている地域がある」ということがわかった。活動を通じてネットワークも構築できた。能登半島里山里海自然学校の3年間を総括したときに、「キャッチボール」という言葉が出てきた。私たちはまだ気づいていないのかもしれないが、今まさに地域の人々とキャッチボールを始めているのだろうか。



そのほかの関係者・参加者の意見

◆ 同じキャンパス内で里山メイ卜の活動をやっているが、学生があまり関心を持ってくれないのがちょっとさびしい。学生とのネットワークができるというのがいいのと思う。

◆ 日常の研究などと並行して、

大学の地域貢献、社会貢献を広めていくには、それらを広めてくださる方の輪を發展させていくことも大切だ。学生をどう巻き込むか、どんな仕掛けを作るかも考えていくべき。



第2部 これからの金沢大学の 地域連携を展望する

第2部では、神谷センター長がコーディネーターを務め、中村学長補佐と井上英夫人間社会環境研究科

貢献・連携は当然の仕事
人間社会環境研究科
教授 井上英夫



金沢大学は「教育」「研究」と「社会貢献」が柱になっているが、大学の構成員のどれだけが認識しているか心もとない。私は、地域貢献は大学の使命ではなく、地域に存在する大学として当たり前だという考えを持っている。そろそろ金沢大学の地域貢献の方向性を定めるときに来ている。

PDCA視点で 学習機会の提供を

地域連携推進センター副センター長
教授 浅野秀重

各地の教育委員会とのつながりの

長、吉國信雄イノベーション創成センター長、浅野秀重教授、宇野文夫地域連携コーディネーターがパネル



なかで、社会教育、生涯学習という形で連携してきた。こういう学習機会の提供というのは、えてして金沢中心になりがち。そこで19市町と連携し、共催の講座を実施してきた。今後は、PDCAサイクルの視点を持つ生涯学習、社会教育事業の実施などが課題になってくる。

里山は大学で しっかり管理を

環日本海地域環境研究センター長
学長補佐 中村浩一

角間キャンパスの里山ゾーンは、これまで我々や里山メイトがボランティアとして運営してきたに過ぎず、限界が表面化している。間もなく大学事務局内に「角間の里山本部」が、また能登には大学の支援組織である

ディスカッションで意見を交わした。討論では、「自治体とうまく連携するにはどうすればよいか」「連携先に依存し過ぎると言いたいことも言えなくなる」といった具体的な問題も多く話し合われ、話を聞いていた教職員関係者もマイクを握って発言するなど、会場は熱気を帯びた。

「能登オペレーティング・ユニット」が設置される。このように大学が正面から地域連携に取り組む態勢が少しずつ進めば、さらなる新展開が期待できる。



人口減対策が 喫緊の課題

イノベーション創成センター長
教授 吉國信雄

人口減（過疎）の問題が待ったなしで迫っている。仮にある地域で毎年400人の方が亡くなり、1人あたり年間100万円の購買力があるとしたら、毎年4億円がその地から消える計算になり、根本的に人口減の問題を解決していかなければならない。また、地域連携に関わる人々には「その場所をどういう地域

にしたいか」と問いかけた。答えられる人は少ないだろう。地域のグランドデザインを描ける人材を育てることも大切だ。



能登を地域連携の モデルに

地域連携推進センター
地域連携コーディネーター 宇野文夫

タウン・ミーティングを重ねてきたが、地域での大学の評判はあまりよくない。「大学の先生が来てくれるのはいいけど、話を聞いただけ聞いて帰ってしまい、その後何の報告もない」と。だから、おそらく地域の人たちに信頼されていない。今はまだ「金沢大学の地域連携といえばこれなんだ」というモデルがないが、可能性を秘めているのが能登での取り組みだ。能登の再生が地域再生の第一歩となるよう真剣に取り組まなければならぬし、地域の人たちも燃えるような気持ちを持つほしい。

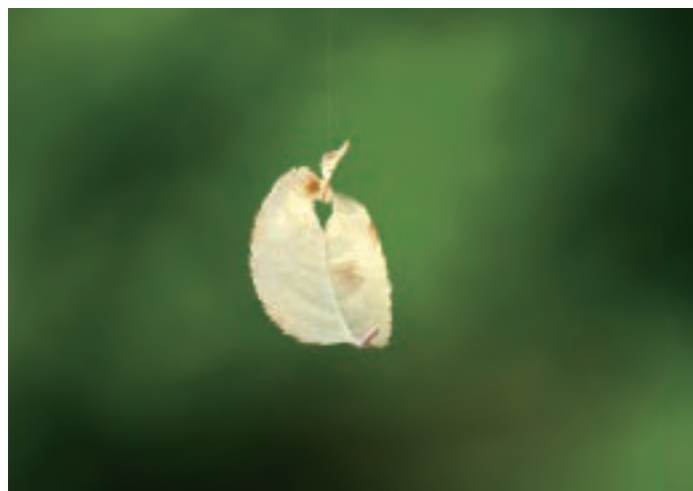


そのほかの関係者・参加者の意見

◆ 大学として今後、社会貢献をどう考えるのか。社会貢献が3つのミッションの一つに掲げられているのに、学内に専任スタッフが2人しかいない。これがミッションを遂行する体制だろうか。活動を学内外にPRする姿勢も不足していたと思うし、学内では学長がトップになるようなしっかりした組織、体制づくりを要望したい。

◆ 地域の人たちとの協力はもちろん不可欠だが、依存関係になってしまっているところも言えなくなるのはまずい。べったりするのではなく、適度な距離感も必要だ。
◆ 地域の人たちと連携しているけど、「どうせいつかは帰っちゃうんでしょ」と言われてしまつと、どうにも言葉を返せなくて辛い。





「里山ペンダント」 竹田裕一郎



「見上げてごらん」 金丸明広



「もうひとつの桜」 荒牧豊



「紅葉のキャンパス」 里山の竹林から事務局棟を望む



「里山のモリアオガエル・夏」
蓮の葉にたたずむモリアオガエル



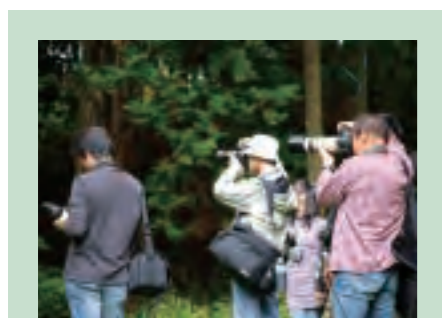
「菜の花の里・春」
角間の里に咲く菜の花



「雪だるまの里・冬」
角間の里に作ったかまくらに“住む”雪だるまたち



「落葉に続く幹・秋」
秋晴れの空に、紅葉した葉をたたえた幹



【金沢里山フォト倶楽部】

平成21年2月に結成。互いの個性を尊重し合う社会人と学生が、協同精神をもって年1回の「撮影大会」や「講評会」などのイベントを実施し、写真撮影を通じて自然の美しさや撮影の楽しさを伝える活動を展開している。



「絆」 福岡寛規

角間の四季を写真で追う 里山の息づかい

600種類の植物、21種類のほ乳類、1千種類以上の昆虫―多種多様な動物植物が共生する角間キャンパスの美しい「里山」。その里山の姿をファイナンダーにとらえ、自然の美しさや面白さ、写真の楽しさを発信するグループが「金沢里山フォト倶楽部」だ。四季の移ろいを収めた写真を通じて、里山の豊かさを確かめてみよう。

金沢大学基金 ご支援・ご協力をお願い

地域と世界に開かれた教育重視の研究大学

金沢大学とその前身校を学舎とした学生は、文化の薫り高い古都金沢とその地の人々に生まれ、大学はその環境を糧として社会が要請する人材を育て、独自性ある研究を展開してきました。

21世紀初頭の現在、大量生産・大量消費型社会から持続可能な社会へと、時代は文明の大転換期にあります。文明を見据え、時代を切り開く英知を備え、未来を付託できる人材を育てることが大学に求められている課題です。これに呼応すべく、金沢大学は2008年4月に「3学域・16学類」へと教育組織の一大転換を果たしました。時代が期待する課題に沿うためには、当然とはいえ財政基盤の確立が不可欠であります。国立大学法人となった今、大学は自主・自律の運営が可能となり、一方で公財政支出のみに頼って経営する時代ではなくなりました。時代の激動する今を、金沢大学は学生のための大学・社会のための大学・環日本海の基幹大学として、さらにわが国ベスト10大学へと発展していく好機と捉えております。

こうした状況に鑑み、学生の修学環境の整備をはじめ、時代を見据えた研究、地域連携、国際貢献を深める活動の支援を目的とする「金沢大学基金」を創設いたしました。金沢大学は、この基金を生かしさらなる高みを目指します。皆様のご理解と格別のご協力を、心よりお願い申し上げます。



金沢大学長

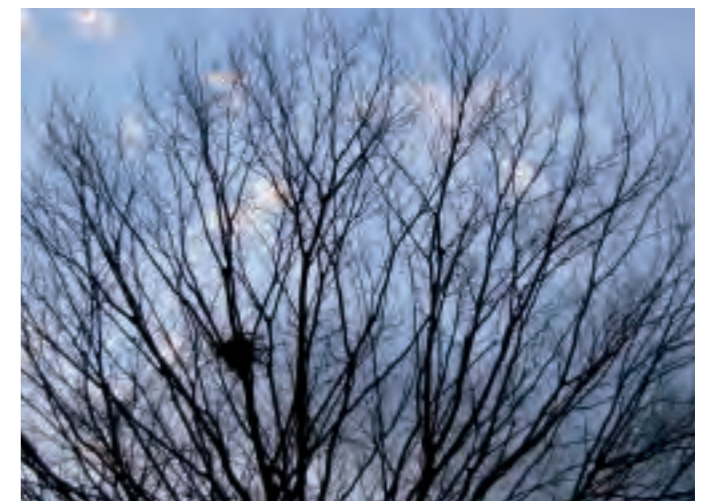
中村信一



「Bamboo Grove」 今村悠太



「天空の里 角間」 片山裕子



「無題」 福岡寛規

編集後記

平成22年度から始まる、金沢大学の第2期中期目標・中期計画（平成22～27年）においても、大学における地域連携の役割は、一層重要となっています。しかし、地域連携の現状、展望などについて、分かりやすく説明できる資料が少なかつたことから、今回平成16年6月に当時の社会貢献室が作成した「地域とともに」をリニューアルし、地域連携の現状を総括した内容を盛り込み、「総集編」を刊行いたしました。なお、この「地域とともに・総集編」に記載されている記事は、地域連携推進センターが実施している事業が中心であるため、この記事のほかにも、金沢大学内には素晴らしい地域連携の取り組みが多数存在していることを申し加えます。この総集編により、皆様の大学における地域連携への関心や理解を深めるためのきっかけとなれば幸いです。

総務部総務課地域連携係 竹田

平成22年3月20日発行

企画・編集・発行

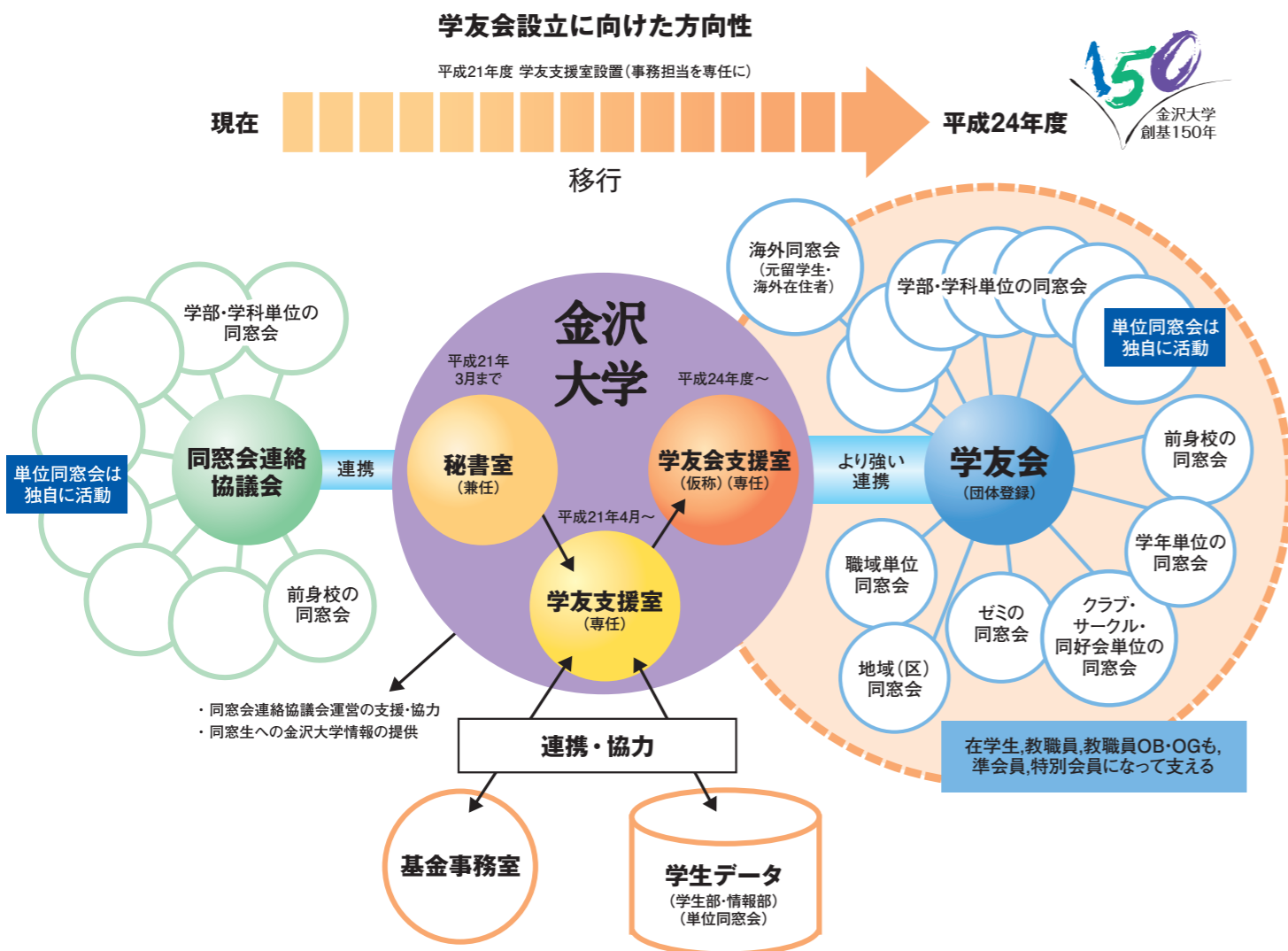
金沢大学地域連携推進センター

印刷 能登印刷株式会社

編集協力 シナジー株式会社

ともに学び、ともに歩んだ 学友の絆を深めませんか

金沢大学は、平成24(2012)年に創基150年を迎えるのを機に、
現在、同窓会連絡協議会を構成する学部等単位の同窓会に加えて、連絡協議会に未参加の前身校同窓会、
入学・卒業同期会、学科・研究室同窓会、学寮やサークルOB・OG会等の参加を得て、
より大きく強固な全学同窓会組織(金沢大学学友会)の確立をめざしております。
地域・職域・サークル・寮等のOB会の活動状況等についてご存じの方は、情報をお寄せください。
同窓会の開催日程をお知らせくだされば、大学から役員等が積極的に参加します。



金沢大学の卒業生・同窓会に関する連絡先

金沢大学学友支援室 TEL 076-264-5081 E-mail:gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp
学友支援室のホームページ http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/ad_gakuyu/index.html

金沢大学基金

Kanazawa University Foundation

金沢大学基金は、学生を応援し、
研究活動を支え、地域社会を育てる基金です

学生を サポートします

- 奨学金の充実
- 学生による主体的な活動・プロジェクトへの支援
- 留学生の教育・研究生活にかかわる経済的支援

[対象例] ■アカンサス・スカラシップ(本学独自の奨学金制度)拡充の支援
■学長研究奨励費等学生の優れた研究への支援
■学生の海外協定校への派遣及び、海外からの受け入れ支援など

将来を担う 研究活動を サポートします

- 研究領域を超えた横断的な教育・研究プロジェクトへの支援
- 次世代の研究を担う研究者の学際的・国際的な活動への支援
- 男女共同参画の支援

[対象例] ■テニュア・トラック制度(公募による世界に通用する若手研究者育成プログラム)の拡大と継続的発展の支援
■若手研究者の海外派遣補助、海外研究者との交流会やシンポジウムなどの開催支援
■女性研究者育成支援など

地域 コミュニケーションを サポートします

- 学生や教職員の地域貢献活動への支援
- 世界と未来を意識した地域資源活用と環境整備支援
- 地域の伝統・文化を見直し、活性化する活動への支援

[対象例] ■生涯学習支援 ■地域医療福祉支援
■能登半島地震の復興活動、地域復興のための生活・福祉・文化・医療の総合的な支援活動
■里山活動の支援 ■地域活性化活動の支援など

【ご寄附の申し込み】

「振込用紙(銀行の窓口からの振込)」および「Webからの申し込み」と「郵便またはFAXでの申し込み」があります。「Webからの申し込み」は金沢大学のホームページ(<http://www.kanazawa-u.ac.jp/kikin/>)をご覧ください。「郵便またはFAXでの申し込み」は下記までご連絡ください。

●一口:(個人)1,000円、(法人)10,000円 TEL:076-264-5075 FAX:076-234-4021
●金沢大学基金事務室(金沢大学本部棟内) E-mail:kikin@adm.kanazawa-u.ac.jp



古き^{らんしゅう}濫觴を尋ねて、真理の水源にいたり、滴また創造の大海をめざす

2012年(平成24年)、金沢大学は、その源流(濫觴)となる加賀藩種痘所の設立(文久2年)から数えて、150年にわたる大きな流れをこの地に刻みます。この間、金沢大学は、創建当時の先端医療に果敢に取り組んだ高い倫理性と大胆な挑戦を常に忘れることなく、〈先魁〉としての人材養成、他なる生命・存在との〈共存〉、革新的な知の〈創造〉を力強く進めてきました。いま私たちは、創基150年を期に、これまでの歩みを継承しつつ、今後150年先の開かれた世界における金沢大学のあるべき姿を描きたいと考えています。

金沢大学憲章は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を掲げています。現代社会のさまざまな課題に立ち向かい、それを解決するための知の創造と人材育成こそが金沢大学の使命と考えているからです。2008年にスタートした3学域・16学類という新しい教育体制は、それにに向けた第一歩です。

歴史文化都市金沢は、つねに新しい文化の創造に携わってきました。これまでの150年とこれからの150年という広い視野のもとで、国境や民族の違いを超えて、世界に向けて情報を発信し、世界の平和と人類の持続的な発展に資することを、金沢大学はめざします。



[連絡先]

金沢大学創基150年記念事業準備委員会

Tel. 076-264-5111(総務部総務課)

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/kanazawa150/>